

静岡が生んだ快男子 嶽陽 長尾建吉 伝

「えーお忙しいところをお運びいただきましてまことに恐縮でございます。

「講談は昔は講釈といいましてあぶれた浪人者が太平記なんぞを街角で話してお布施を頂戴するというのが始まりだそうです。

昔は「講釈師 見てきたようなウソをいい」とかいわれておりましたが、さて本日はこの一番町地区で生まれた快男子長尾建吉について本当の話を一席ご披露させていただきます。

「萬延元年（1860年）二月十日、（この萬延元年というのは有名な桜田門で井伊大老が襲撃され暗殺されるという事件が起こった年です。）

「研師組頭磯谷利右衛門の三男として、静岡市研屋町七十一番地で生まれた建吉は幼くして剛毅、利発だが腕白な性格で近所の勤めはならず、手を焼いた長兄の利三二は十五歳の建吉を東京日本橋で繁盛していた斉藤善兵衛商店の丁稚奉公させたのであります。

「おれは日本一の金持ちになってやる、」と心に刻んだ建吉は、朝は誰よりも早く起きて働き、夜は主人の斉藤善兵衛が信心のため夜遅く帰ると木戸をあける役目を果たすなど休む暇もなく働いたのです。

「時は明治十年、パリにおける万国博覧会に斉藤商店からも出展し、誰を随行員とするかの席において十八歳となった建吉は並み居る番頭、先輩たちをさておいて自分を代表にするように頼みました。

「ご主人様 その役目はどうか私にいかせてください。」

「お前が行きたい？一番若いお前が行ってどうするんだ。」

「私は一年前から虎ノ門にいるフランス人に頼んで語学や経済について学んでおりました。」

と仕事が終わってから勉強していたことを明かしました。これには誰も驚きうなずくしかありませんでした。

「明治十一年二月十一日、

（この明治十一年というのは、その前年西郷隆盛が明治政府に対して反乱した西南戦争があり、この年には政府の実力者大久保利通が暗殺されるなど物騒な時代でもあり、東京から大阪へ行くにも家族と水杯を交わして出かけたとい

う時代でした。)

へきてこの明治十一年、十九歳の風雲児は主人の代理で横浜からイギリス船「タナエス号」で出帆し、香港で乗り換えて三月二十七日マルセイユ港へ到着。船中ではダンスを習ったり、終生の友人でのちに洋画界の重鎮となる山本芳翠と出会ったことが建吉のその後の人生に大きな変転をもたらしたのであります。山本は建吉を神童と言うくらいに高く評価していたのです。

建吉はパリ万博では、刀剣、^{よろいかぶと}鎧兜、漆器などを展示販売の実績を挙げました。

「フランス政府のものだが、この鎧兜を購入したいが予算不足のため値引きしてくれないか。」

「博覧会開会最中は価格引下げはできないこととなっております。それはわが国の不名誉となってしまいます。しかしフランス国の美術館へ展示するというのなら万博の閉会後に献納させていただくことにいたしましょう。」

「わが国では、美術品を無償で入手するという法はない。しかたない。貴下の価格通りで購入するとしよう。」

というわけで出品価格どおりで購入させました。

まさに随行委員中最若年の面目躍如と言うべきでしょう。

へ パリでの活躍ぶりが大きな評価を得て、翌年には豪州博覧会へ静岡県嘱託として、そしてその翌年の明治十三年には北米やロンドンでの支店開設のため渡米することとなります。ロンドンでの仕事も片付いた矢先、アメリカからお世話になった江木高遠一等書記官の死亡の連絡がはいってきたのでした。

「おい、大変だ。江木さんが仲の悪かった領事からお前の世話をしたお陰で収賄の嫌疑を受けて死んでしまったぞ。」

「え～、お世話になった江木さんが自殺？なんでだ。」

「どうもお前がアメリカの商社に品物を預けて借金したのが関税違反で、しかも贈賄の疑いもと言われたらしい。」

おそらく役人の責任逃れから部下をきつく糾弾し、義憤と身の潔白を訴えるために自死したものであろう。まだ廃刀令から五年、武士の心得が残されていた時代でございます。

外務省は商品見本の引取りと借入金の返済を斉藤商店に命じて処理をさせました。

建吉は急ぎパリへ戻り帰国のために待機、そして帰国の船を待つ間は親友の山本芳翠と連日ルーブルやルクセンブルグなどの美術館めぐりをしてはおりません。

(こんなときに遊んでいる場合かと思われる方がいらっしゃるようですが、この当時パリから日本まで一ヶ月半、その船を待たなくてはなりません。今のよう若いお嬢さんがちょっとパリまでお買い物って具合には行かなかったのであります。)

心に苦悩を抱えた建吉は、帰国後、

「社長さん、大変お世話になりましたが私はこれで身を引かせていただき等ございます。」

「いったい、お前はこれからどうするつもりだ。まだ若いから精進次第で大きな商いもできるようなれるんだぞ。」

「いや、私は人の情けを無にしてみました。もう商売、金儲けの仕事は一切手を引かせていただくしかありません。」

こうして前途揚々の二十一歳ながら失意のうちに静岡へ帰省するのです。

へさて静岡の実家では兄の利三二は、明治九年の廃刀令のあおりを受けて研師、刀の鞘づくりなどの需要が無くなり、家業の技術であった漆器作りを行っておりました。当時はまだ鞘師など漆職人も残っていたからです。

明治十五年、二十三歳となった建吉は自称世捨て人と言いながら、実家の漆器の改良研究に5年間没頭し、500種を超える変わり塗りと言われた漆工芸を開発したのであります。

「塗るよりも色の研究の方が多かったなあ。紫、浅黄、黄、青、緑、白等と思うように進まなかったが、一つ新しい発見があると知っている職人たちにこれを隠したりせず、時としては出向いて塗師屋、問屋にも教えてやったもんさ。それから日本中の漆器の塗り方も調べてみたりした。やはり欧米での見聞を生かして外国人に向くものを製造することに心掛けたもんだ。それに量産のため一部機械をつかうこともやったさ。そんなわけで静岡の漆器は海外からの注文は日増しに増えていったなあ。」

「こうした技術を口で言や〜簡単だが、当時でも教わったやつがいつの間にか自分で改良したかのように言うものが居たのも笑いごとき。」

(いつの時代にもこうしたヤカラも居るものです。他人に作らせた音楽を自分が書いたなどといって大勢の人をだましたやつがいましたね〜)

「利三二兄さん、静岡の漆器の欧米諸国の評判を上げるには良い製品を作って輸出するしかない。どうだろう、町内の顕光院の前に空き地があるからあそこへ漆工場を作ったらどうだろうか。」

「そうだな、そりゃあいい考えだ。ひとつ新しい会社も作るか。静岡漆器工

業社と言うのはどうだろう。」

「ああ、いい名前だ。これで静岡漆器はおおいにひろげられるだろうな。」

「この漆器が柱となって明治三十年代には変り塗りを施さない漆器は見当たらなくなり、その盛隆は大正年代まで相当の生産量を誇ったのでした。静岡漆器業者の受けた恩恵は莫大なものであり、静岡の地場産業は大いに興隆したのでございます。

「さて明治二十年、研究の完成を見たこの頃から建吉は生来の気宇の大きさもあり、再び徒歩で上京を目指すこととなり、我が国の洋画界の交流の為に絶大なる貢献を成し遂げることとなります。

このように外国で活躍し、静岡の地においても大きな貢献を成し遂げた建吉でございますが、本日はお時間の関係もありますので、その後の活躍のホンの一端をご披露させていただきたいと存じます。

「さて東京では本郷湯島の叔父治平の家に居候をしながら塗師の仕事をはじめた建吉は、折よくパリの画業を終えて帰国した山本芳翠を、さっそく面会に行くこととなります。これがまた建吉の大きな転機となるのでございます。

「ところで磯谷君は今何をやっているのか。」

「ああ、俺はいま本郷のおじさんの家で塗師の職人をやっているんだ。」

「そうなのか。自分もいま洋風画額縁研究所を作り洋画の額縁づくりをやっているんだ。君もやってみないか。」

と誘われ山本の『洋風画額縁研究所』に携わることになりました。

(建吉)「今の芝烏森で柔道の道場跡を額縁研究所としたもので、こしらえるといっても何もわからねーんでフランスから持ち帰った本で研究したが、なかなか型が抜けないで三年かかってようやく模様らしいものが出来た。その間、喰う事についてちゃーホテルの工事、日除けなんかをこしらえたりしたもんさ。」

「建吉は近くに家を借り、小唄の師匠をやっていた気風のよいことで評判の川上茂登子と長男の一平と同居する。その後、烏森の研究所が類焼のため、明治二十五年、芝愛宕町に小さな工場を建てて額縁屋「磯谷商店」を創業したのでございます。

建吉は装飾の仕事や定規細工などの仕事をしながら額縁の改良を続けていたが、ようやく盟友山本芳翠の画が芝公園の明治美術展に出展、宮内庁と本願寺

へ納品するための額縁を創って売れたのが最初でありました。

明治二十八年には洋画家会の大御所となる黒田清輝がパリから戻ってきたので面会に行きます。

「あれ、黒田さんは法律の勉強のためパリへ行ったんじゃないのか。」

「ああ、そのつもりで行ったんだが山本の奴がけしかけるもんだからもともと好きだったんで法律の勉強の合間に絵の勉強もやっていたんだ。」

「へ～、さすが華族の御曹司の云う事はちがうなあ。」

「ところで磯谷さんは、今はどうしているんですか。」

「あっしや、商売の道はやめて西洋額縁づくりをやっているんだ。」

「じゃあ、私の勤める東京美術学校にも絵の材料なんか集めて納めていただくと助かります。」

こうして黒田画伯との終生にわたる交友も続きます。黒田が新進の若手洋画家を集めて白馬会を結成するとこれを陰に日向に応援するのです。

明治三十一年、黒田画伯が大作の「昔話」制作のため日光の山中に閉じこもっての準備のため同行しております。家は四軒ほどしかなく高照庵という茶亭に雑居し、雨が降れば増水し外との交通が遮断されてしまうような場所でした。

「こんな辺鄙なところで仕事ができるのかね。」

「いや磯谷がいるから陽気でいい。あんたは若い連中を笑わせたり、囲碁や将棋の相手もしてくれるし、なんか俳句まで作っているんだって。」

「ああ、今日も一句できたぞ。」

「せっかくだから披露してくれ。」

『拝殿の真赤に見えて夏木立』と言うんだ。真っ赤と深緑のバランスがいいだろう。ところで黒田よ、そろそろ絵の構想ができたのかね。」

「うん、題材は『小督の局』だ。」

「ああ、琴の名曲で有名だな。俺も聞いたことがあるぞ。」

「お前の顔も、旅の坊主の顔に使ってやるかな」

などと言って一行はのんびりやっていたようでした。

この頃の白馬会へ結集する新進気鋭の若い画家たちが出展した裸体画が警察から苦情が出たのであります。

「おい、大変だ。白馬展に出展した裸婦の絵を警察が飾ってはいかんとやってきたぞ」

「なに頑迷な警察の言うことなど聞いては芸術はなりたたん。裸が気に

入らんだったら腰巻をさせろ」と言って建吉は額縁ごと腰巻をさせて展示させたのです。

ゝ建吉の剛毅な性格は、有栖川宮家の洋風室内装飾を依頼されたが、どうも途中のイザコザで中断されており、さらに赤坂離宮の天井画箔押しの仕事の際も建吉の気質を知らないで口出しする宮内庁の役人たちをどやしつけます。

「うるせ〜、どびんじゃあアルメー 横からつべこべ口を出すな」

ゝ後日、宮内省の技師が気をつかったのか友人岡田三郎助が描いた画をある富豪の作る洋室の天井画に貼り付け、金箔押し仕事を斡旋してくれた。当時、洋室の装飾やそのための箔押しなどをできる者はあまりいなかったからでございます。

ゝ遠慮会釈のないのは天下にときめく西園寺公爵やら松方正義侯爵などパリで知り合った元老たちなどを相手に一緒に飯を食ったり、冗談を言ったりの屈託のなさでございます。

建吉はこれらに取り入って權益を得ようとか、利用しようとはこれほどにも考えておりませんでした。

ズ〜と後のことですが、松方正義公爵のところでは友人が建吉の話をしたところ、松方公に「たまには遊びに来るように言ってくれ。」と言われて伝えました。

「磯谷さん、松方オン大将がたまには顔をだせ、と言っていたぞ。」

「忙しいので来れるならそっちが来てきてくれ、言っておいてくれ。」

といい、それが伝わると松方公も「そちらが来いと申すだけ。」と笑って言ったというエピソードも残されております。

こうしたことから画業を目指す若い画家たちは磯谷の額縁に入らなければ一人前ではない、とあこがれの的でございます。

「磯谷さん。私の絵の額縁も作っていただけませんか。」売れない画家たちは恐る恐る額縁を注文します。

「金はあるのか。」

「いや、全然ありません。」

「しょうがね〜なあ。売れたら払ってくれればいい。」

「ありがとうございます。でもズ〜と売れなかったらどうしましょう？」

「しかたねーや。そのときは香典だ。」といったやりとりで磯谷商店の食客となったり額縁代を払えなかった画家は大勢いたものでした。

「だいたい洋画家でオレの額縁を使わないやつはモグリだ。」

「画家で額縁の借金のネーやつはトテモ大家にはなれん。」

建吉は気炎を上げていましたが職人を抱え給料や材料費の支払のために質屋へ行ったり、その他の仕事を探しながら画学生たちの面倒は最優先に見ていたのでございます。

それは単に額縁代のツケだけでなく、描いた画に対してもズケズケ批評を与えておりました。

ゝあるとき、東京美術学校の若い画学生が白馬会の展覧会へ行くと「短いヒゲをはやしたおじさんが大先生を黒田などと呼び捨てにして、先輩の画家たちをつかまえて『おい白瀧、おい北』と呼び捨てにしなから『あの空はなんだ、なっちゃーいね～や』とか『おい、この足はどうしたのか』などと乱暴な口を利いても誰も怒る者はいない。不思議になって聞いて見ると、『あれが有名な磯谷さんだ。今に君たちもあの親父さんにやられるんだ。』と言われたものでした。その後、その若い画学生が白馬会に出展するようになると、さっそく、

「な～んて意気地のね～ものを描くんだ。ビクビクして描くんなら画なんかやめちまった方がいい。」

なんて毒舌も言われたものでしたが、若い画学生たちはその毒舌を聞くのも楽しみでもありました。

ゝ明治四十一年の第一回文部省美術展覧会では、中村不折画伯の題字により会場の装飾を任されるようになり、こうした実績を背景に、静岡においても展覧会をやりたいという話が舞い込みます。

「磯谷さん。折り入っての相談ですが、静岡で美術展覧会をやってみたいのですが」

「そうか、地元の若け一衆から頼まれたんじゃあ、ひと肌脱ぐとするか。」

「ありがとうございます。それでは発起人代表になっていただけますか。」

「いや、代表は黒田にしよう。」

「えー。あの美術界の重鎮の黒田画伯ですか。」

「もちろんそうだ。あといろいろ応援をしてもらわなくてはならんから、岩村男爵にも添え書きを頼むとするか。あとは大家、中家、駆け出しも含めて50～60人も出展を頼むとするか。」

「や～すごいですね。これを機会に静岡でも美術研究会を作って活動を進めませう。」

「うん、そうしてくれ。展覧会には県知事や市長も呼んで盛大にやろうではないか。」

この展覧会は大正二年までは毎年続けられました。また熊本洋画展覧会の協力要請に対しても在京の画伯たちに協賛出展を依頼し百数十点を送っているの
でございます。

大正期になっても東京大正博覧会に額縁を出展して金賞を受賞し、東京日日新聞より美術界功労賞を受賞、さらに日光東照宮の寶物館に和田栄作描く天井画の箔付け作業で日光に泊り込むが、職人たちの人気は高く、

「いいか、わしがパリから戻った明治一五年頃、自転車の話しをしたところ誰も信じちゃ〜くれなかったぞ。」などとみんなを笑わしていたのでございます。

しかし還暦を前にして長男一平に事業を譲り自身は静岡へ隠棲することになるのであります。

〽大正七年、建吉は静岡市川辺町へ居を移し、尚美会、正風会などの展覧会や福岡の展覧会を後援しますが、隠棲と言いながら長男一平の訪欧の折には上京して見送り、赤坂御所の額修理、霞ヶ関離宮の皇太子（のちの昭和天皇）の肖像画額縁修理、東宮ご成婚記念肖像画額縁修理などを依頼されて上京しております。現代で言えば人間国宝級であるといえましょう。

だが一番こたえたのが大正十三年、長年交友のあった黒田画伯の死去でした。

「黒田は日本にとって必要だ。自分が黒田の身代わりとなって死にたい。」とその悲嘆の想いを強く述べていたのでございます。

〽また昭和二年、明治天皇の肖像画保存整備のため上京し、これにより明治神宮宮司揮毫の額を出生地研屋町の氏神である静岡神明宮へ金箔を施し奉納いたしましたが残念ながら戦火で焼失しております。

さて昭和四年、建吉は、

「わしが死んでから集まってもらったって仕方ない。今のうちに別れをしておきたい。」と言い出しました。これにより横浜市鶴見の花月園において「生別の宴」が行われました。

「おい、磯谷のじいさんが生前会をやりたいといっているぞ。」

「そりゃあ、おもしろい。日本中の洋画界の連中に呼びかけて盛大にやっつてやろうじゃあないか。」

「そうだなあ、おれも若いころ額縁代をけっこう踏みたおしてきたからなあ。」

「場所はどこにする。」

「横浜の鶴見に花月園という風流な旅館があるぞ。」

「会の名前はどうする。」

「うん、生別の宴ではどうだ。」

「そりゃあ、いいな。」

発起人は白瀧幾之助、北連蔵などの大家たちです。出席者は帝展、二科会、春陽会など総勢百四人、参加者はことごとく祝辞を述べ、建吉翁を囲みスケッチをし、寄せ書きをしている姿は写真で見ても壮観でございます。芳名帳は五冊となり、題字はそれぞれ和田三造、石井伯亭、中村不折などの大家が題字を書き参加者が名を寄せ、当時の新聞各社がその模様を伝えております。

やむなく欠席した者は手紙、ハガキ、電報、そしてご祝儀を届けるなどその数も百人以上でございました。

これに引き継いで翌五年、静岡においても、

「おい、磯谷のじいさんは今年七十になったんだぞ。」

「それじゃあ、古稀じゃあないか。」

「そうなんだ、本人は昨年、生別の宴をやっているから、いまさらと言うかも知れんが、この静岡で何かやらなくては恩を返せないからなあ。」

「場所は浮月楼、古稀生別会でどうだろう。」

「うん、それでいいだろう。」

これは静岡尚美会など地元の関係者が中心でしたが約七十人で東京からも北連蔵などが参加しており、染織家の芹澤銈介氏も出席しております。

こうした多くの友人たちに恵まれた建吉であるが、昭和十年に建吉に対して藍綬褒章が受けられるように運動します。

「先生、いよいよ藍綬褒章がうけられますよ。」

すでに病床にあった建吉は、

「そんなものダメじゃ。」と言って拒絶したのでございます。

昭和十三年十二月三日、建吉は逝去しました。遺骨は芝高輪泉岳寺に納骨されていますが、故人を慕う者たちによって静岡市葵区大鋸町の玄忠寺に一周忌の日付で記念碑が建立されたのでございます。

碑文「嶽陽 長尾建吉」の碑文の上には黒田画伯の描いた似顔スケッチが彫られております。碑の裏側には洋画家の大家たちや各絵画会や美術関係団体の名が立派な自然石に彫られております。

「建吉翁は商売人を続けたら大富豪となった、政治を目指せば大臣、美術家にもなれた。しかし自らを犠牲にしながら美術界に貢献し、それに対して少しも苦にすることはなかった。まさに天を恨まず、人を咎めず、従容として迫らず生死の外に超越しており、ほとんど達人の精神的境地に入っておった。」

このように評価されているそのみごとな才覚を他に尽くす人生を送ったこの

ような傑物がこの一番町地区、この静岡市から輩出したことがうれしいことであり、市民の多くに人に知っていただきたいと願い一席お話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

* この文は平野喜久次様の資料集「長尾建吉」をもとに綴らせていただきました。町内生まれの傑物を紹介させていただきました。佐塚 充